「よかったなあ」がつながる世界

大仙市立大曲西中学校一年　佐藤　ひより

「お母さん、もう私は中学生だよ。」

夏休み、私の横に無理矢理割り込み寝転んできた母。小さい頃のように、手には一冊の本。

「もうじゃない、まだ中学生よ。はいはい、読み聞かせをしてあげようね。」

二人で大笑いしながら、母はその一冊をすっと持ちあげた。もう、しかたがないなと思いながら、楽しんでしまおうとのぞきこんだ。

「よかったなあ」草や木が、ぼくらの、まわりにいてくれて。まどみちおさんの詩が音になる。この言葉に力強さを与えるように、濃い青緑色の木々の下にタくの動物、色とりどりの花の絵が広がった。私は絵本が好きだ。大きくなるにつれ、新たな絵本の力にひきつけられている。両面に広がる大きな絵。そこに短く添えられた言葉。それなのに言葉の量に比例しないほどの広がりがある。まどさんの言葉を読む母の声と共に、私の心は美しい

世界に向かって広がり始めた。繰り返される「よかったなあ」の言葉。本が閉じられる頃には「よかったなあ」がどんどんこだましているような、そんな気持ちになった。そして「あなたの中の『よかったなあ』はなあに」。と優しくたずねられているような気がした。

「よかったなあ／草や木が／ぼくらのまわりに／いてくれて／目のさめる／みどりの葉っぱ／美しいものの代表／花」。去年までの私ならば、もっとさらりと読めた気がする。でもこの春を思い出すと、それは深く響く言葉になった。

この四月、桜の満開がどうか遅れますようにと初めて祈った。祖父ならば、制服を着た中学一年の私と桜を写真に撮りたいはずだから。祖父の体の準備が整うまで、満開はもう少し待っていてと願った。

もうすぐ桜が咲きそうな春の日、祖父が救急搬送された。どうしよう、病気だなんて。話せなくなったら。一緒に桜を見る約束は。「どうしよう」の言葉は唱えれば唱えるほど

もっと心を不安にさせた。手術が終わり、病室移動のためにみんなで来たエレベーター。お医者さんが優しく言った。

「左手を上にあげて、グーパーできますか」

みんなが見守る中、麻痺がみられると聞いていたその手を祖父は見事に動かしたのだ。あのとき、エレベーターは、はじけた喜びでいっぱいだった。私はあの時の「よかったなあ」を忘れない。山菜好きの私たち。山の緑がどんどん変わる春を見る当たり前。満開の桜の下で写真を撮る当たり前。人生の節目に、祖父が専属カメラマンのようにそばにいてくれる当たり前。目のさめるような緑の葉も美しさ代表の花も、やはり祖父と一緒に見たい。

「当たり前」にあふれていた幸せに気づいた嬉しさを、思わずまどさんに伝えたくなった。

「よかったなあ」草や木が、どんなところにも、いてくれて、鳥や、けものや虫や、人、何が訪れるのをでも、そこに動かないで、待っていてくれて。この言葉は、私に祖母を

思わせた。泊まりに来た祖母の隣で寝たのだが、真夜中もなかなか眠れずごろごろしていた。すると小さな小さな声が聞こえてきた。

「最初はグー、じゃんけんぽん」。

祖母は寝ていたはずなのに、私も静かにしていたはずなのに、眠れずにいたことに気づいてくれたのだ。他の誰にも聞こえない小さな声。私と祖母二人だけの特別な夜。声を押し殺して二人で笑いあった。「早く寝なさい」ではなく、きさかの「最初はグー」。暗闇にわくわくの魔法をかけてくれた祖母との夜が、きどさんの言葉によって思い出された。私は祖母を「親分」と呼んでいる。それは、「どんなひよりちゃんでもいら。しょい。いつでもどこでも応援団だよ」のまなざしで、両手を広げて待っていてくれる安心そのものだから。足が痛くて車いすの祖母は、いつも指定席から私を丸ごと待っていてくれる。きどさんの言葉を「よかったなあ」祖母がいてくれてノどんな私が訪ねるのをでも」そこにうご

かないでノ待っていてくれて」に置き換えてつぶやきたくなった。

まどさんのやさしい言葉を見ていたら、ふと小さかったころを思い出した。

「ねえみんな、ふきのとうがでてきたよ」

「ほんとだね。でてきたね。うれしいね」。

「みんな、たんぽぽの綿毛が飛んでるよ」。

「ほんとだね。飛んでるね。よか。たねえ」。

楽しさやうれしさを、大好きな家族におすそわけしていた小さな私。そうか、うれしい発見のおすそわけは幸せを増やしていたのだな。

そこにぴったりな言葉が「よかったなあ」なのかもしれない。一〇四年の人生を送ったまどさん。きっと「もう一〇四歳」ではなく、「まだ一〇四歳」の新鮮な発見ができる人であり、それを優しく言葉でおすそわけできる人だったのだと感じている。

「よかったなあ」は魔法の言葉。まどさんから受けとったやさしいバトン「よかったなあ」を、今日も大切な人とつぶやきたい。

20×20